



TITLE:

# <大會抄録>清代政治史の一考察： 康熙帝時期の黨争について

AUTHOR(S):

北村, 敬直

---

CITATION:

北村, 敬直. <大會抄録>清代政治史の一考察：康熙帝時期の黨争について. 東洋史研究 1983, 42(3): 540-540

ISSUE DATE:

1983-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153899>

RIGHT:

## 韓國併合前年に於ける李完用の詩に就いて

谷 光 隆

李完用は日韓兩國の併合條約が締結された際、韓國側を代表して記名調印した全權委員であり、當時同國の内閣總理大臣であった。奈良女子大學には「春畝公七絶 李完用 金允植 朴泳孝 唱和」と箱書のある詩軸を藏しているが、これは併合の前年、京城の翠雲亭で催された初代韓國統監伊藤博文の歡送會席上での作である。この詩軸を材料として李完用の秘められたる心の底を探ってみたい。

伊藤博文の詩に唱和した李完用の詩は「春至無形 因時生迹 天長不老 以古爲年」というものであるが、これは詩經の詩形である。その詩意は詩經の六義の一つである興の精神と斷章取義の精神をもつて解釋すべきものであり、とくに最も重要な第四句は、詩經、小雅、甫田の首章を踏まえたものである。

また、この詩意と不離一體の關係にあるのがその關防印の印文「嘯怨見南」であり、これは壬辰の役（文祿の役）以來の朝鮮人の斥候の氣風と、日清戰爭以來の排日の氣風が二重寫しとなったものと察せられる。

では、博文の七絶に對し何故李完用が詩經の詩形をもつて唱和したのかといえ、それは恐らく博文の用いた關防印の印文「官樂肅」に觸發されたものである。官樂肅は、詩經、檜風、素冠の首章と、唐風、鶉羽の首章を踏まえたものと考えられるが、これに對

抗した李完用の心理的立場は、民族主義を堅持したものと云うことが出来る。

## 清代政治史の一考察

——康熙帝時期の黨争について——

北 村 敬 直

康熙帝の二〇年代に至って、清朝は三藩の亂を克服し、ようやく王朝の基盤が固まったといわれる。ただ帝は、その後もロシアとの國境紛争、ジュンガル部との交戦とつづく外征のためには、引きつづき八旗兵に依存せねばならず、他方漢人統治のためには漢人官僚の力を借りねばならなかった。ために帝の政治權力は漢人貴族の勢力と漢人官僚の勢力との二本足の上に立ち、六〇年の治世を通じてそのバランスはたえず動いた。その治世が黨争によつて彩られていることは周知の事實で、今回はその中から、康熙四〇年代末から五〇年代にかけておきた兩江總督噶禮と江蘇巡撫張伯行の黨争をとりあげるが、これは舞臺が中央でなく、江南という地方政治であった點で史料的には珍らしいケースといえよう。この黨争は①「宜恩恭案」、②「江南鄉試案」、③「牟欽元案」の三事件からなるが、時間の關係上、そのいずれかを中心に説明したい。